



LA NOUVELLE

N°.6

PRINTEMPS

東京外語協会
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10
本郷サテライト 東京外語協会
発行責任者 神奈川孝子 (昭 37)
2011.3.25 発行

仏友会（神奈川孝子会長）は、昨年11月20日、東京・本郷サテライトでの秋の「サロン仏友会」で恒例の講演会と「ボジョレ・ヌヴォオを楽しむ会」を開いた。講師として招いたのは、サントリー勤務の長いワイン・アドバイザーで当会幹事でもある中村日出男氏で、フランスのワイン産地名の語源についての豊かな知識をスライドを使ってわかりやすく解説。約60人の会員たちも、現場感のあるワインよもやま話に聞き入っていた。

講演後には、発売解禁となったばかりの2010年産の各種ボジョレ・ヌヴォオを中村氏の解説入りでみんなで乾杯、新酒の味を堪能した。

当日の中村氏のスライド解説文は7,000字を超える熱のものだったのだが、紙面に限りがあるので、大幅に削っていただき、再録する。

「フランスワイン産地名の語源を訪ねて」

中村日出男 (昭 49)



ラテン語の地名を形成する主な接尾辞として、次のものを覚えておくと、現代の地名の理解にも役に立つ。

【部族名 + ia】の例として、Gallia ガリア = Galli (<Gallus) +ia や Francia フランキア = Franci (<Francus) +ia つまり「フランク族の土地」。【部族名 + ica】の例としては、(Terra) Celtica ケルティカ = Celtae +ica 「ケルト人の土地」や

(Terra) Belgica ベルギカ = Belgae +ica。アフリカやコルシカも同類。【地名 + ensis】では、Narbonensis ナルボネンシス。これは今のプロヴァンスの一角の地名。【部族名 + acum】の例としては、フランス中にある代表的な村の名 Vitrac = Victoriacum<Victorius(Victor) +acum。つまり「ヴィクトリウス又はヴィクトル氏の土地」。

Beaujolais や Lyonnais などに見られる地名語尾 -ais は、ラテン語接尾辞 -ensis の対格 -ensem が音韻変化してきたもの。これが現代フランス語では -ais、イタリア語では -ese、スペイン語では -es になった。

Champagne は、Campaneus 又は Campanius 「野原の」 (<Campus 「野原」) + ia => Campania 「草原地帯」=> Champagne と変化してきたもの。つまり、一般的な呼び名なので、珍しい。スイスにもシャンパーニュ村がある。コニャックの最上等の土地区画は、Grande Champagne という。

シャンパンの中心地の Reims ランスは、歴代のフランス国王の戴冠式で有名だが、元は Remi レーミ族 (仏 Rèmes) = 先住民だったケルト人の一派の呼び名に由来する。同じくシャンパンの中心地、Epernay エペルネの語源は、Sparnacum (Sparnacus)<Sparno +acum。Sparno は、現代フランス語の épine に相当。従って、「いばらの原」。

Bordeaux は、ガリア時代の旧名が Burdigala であることは

わかっているが、意味不肖。半世紀前の名著「フランスワイン」の著者アレクシス・リシーヌ (ロシア出身のアメリカ人で、ボルドーにシャトーを持っていた) は、Bordeaux の語源が bord d'eaux 「水のほとり」であると書いていたが、これは間違い。ガロンヌ河やドルドーニュ河が合流してジロンド河になる一帯なので、eaux が複数形になっていると思ってしまう気持ちもわかるのだが。現在のプティ・ロベール固有名詞辞典を見ても、ボルドーの語源は不明とある。

ボルドーといえば、Médoc メドックの赤ワイン。これは、pagus medulicus の pagus (= 仏 pays) が省略されて残った medulicus メドリクス (ドの上にアクセントあり) が縮まったもの。Meduli メドリというのは、「蜂蜜酒を飲む人たち」の意味。昔から、ブドウの実があるところには、よくミツバチが集まり、ハチミツを取ることは珍しくなかった。

ボルドーの白ワインといえば Graves。これは grèves の別形で、ブルゴーニュのボーヌにも、Grèves という名前の一級畑がある。砂や小石で覆われた平らな土地を指す言葉。

メドックで最も有名な村の一つ、Margaux マルゴーの語源：スウェーデン語の Märkhus = Märk メルクの部分「指標」+ hus フス「家」に由来する。海からやってきたゲルマン人から見て、マルゴー村の高台にある集落が、陸地の指標になったものと考えられる。ドイツ語 Merkmal メルクマル「指標」の語源と同じ。hus は house の古英語の形だが、現代でもスウェーデン語の「家」は hus と言う。

Bourgogne ブルゴーニュの語源は、Bornholm ボルンホルム (旧名 Burgundarholm) => Burgundar + ia => Burgundia 「ブルグンド族の土地」=> Bourgogne と変化してきたもの。現代英語では Burgundy なので、英語綴りのほうがフランス語よりもラテン語の地名に近い。元々、今のデンマークあたりに住んでいたゲルマン人が南下してきて住みつけたのがブルゴーニュという地名の始まり。

ブルゴーニュの白と言えば、シャブリ。その最上の区画は Grands Crus 「特級」にクラス分けされている。Chablis の語源は、ケルト語 Cab (家々) + leya (森のそばの) => Cableiae で、元はこの一帯が森に囲まれていたものと見られる。Cab は、現代フランス語の cabane 「掘っ立て小屋」の語源とも共通する。代表的な Chablis Grands Crus に Blanchot ブランショがある。文字どおり、畑の土が石灰質で白いところから来ている命名。

Clos de Vougeot クロ・ド・ヴージュ

Clos< ラテン語動詞 Claudere の過去分詞 Clausum 「囲われた (ところ)」。ブルゴーニュには石垣で囲まれた畑が多い。Vougeot<La Vouge ヴージュ川 +ot (指小辞。派生を表す)。日本では、ほとんどの人がヴージュと呼ぶが、現地の発音はヴジョまたはヴジョーと聞こえる。これは、自動車の Peugeot のことをプージュとは言わないのと同じ。ナポレオンが愛したことで有名なワイン Chambertin シャンベルタン

Chambertin = Champ de Bertin (<Bert + in) の意味。Bert はゲルマン系の氏族名のひとつで、-in は派生を表す。つまり、

オリーブ、鴨、スモークサーモン、手作りの牡蠣料理、ドライトマトなど。

なかでも大好評なのが Pain Surprise (写真)。食パン生地やライ麦生地のパンをくりぬいた中に、中身のパンで作った各種のサンドイッチが入っています。外側がまたとても美味しいので、最後にこれを切り分けて (早い者勝ちで) 希望者に差し上げています。

大型のパンの中にサンドイッチが入っているというのは、フランスのパーティーではよく見られるのですが、「日本でこれにお目にかかるとは思わなかった」と感激して下さる方も多いようです。荻窪に本店がある「ムッシュソレイユ」というパン屋さんで入手できます。

「ベルタン = Bert さんの子孫 = の畑」。

次に、幻の Romanée-Conti ロマネ・コンティについて。

Romanée の名の由来は、Romani ローマ人か? この土地には、既に紀元1世紀にはブドウが植えられていたという。また、あるブルゴーニュの歴史の大家によれば、roménie ロメニー「神酒」「甘露」という、あまり聞かない言葉が語源だとも…。真相はよくわからない。

ブルゴーニュ最上の白ワインのひとつ、Corton-Charlemagne コルトン・シャルルマーニュについて。

Corton<Curtis Othonis クルティス・オトニス <Otho (紀元1世紀のローマ皇帝オト)。

Curtis はフランク人の言葉で「宮廷」や「領地」。つまり、「皇帝オトの荘園」が語源。

Charlemagne のラテン語名は Carolus Magnus カロルス・マグヌス。フランク王、兼、神聖ローマ皇帝のカール大帝のこと。

ブルゴーニュ白ワインの最高峰 Montrachet モンラッシェについて。

古い文献では、Mont Rachaz, Mont Raschat, Mon Rachat, Mont Rachat, Montrachet の綴りも…。

Montrachet = mont chauve 「はげ山」 <rache 「しらくも」の意味であることは確実。

世界最高級の白ワインにはふさわしくない言葉だが…。

村名の一部になっている Puligny-Montrachet の Puligny は、ガリア語の *pol 「沼地、湿地」(アステリスクは、言語学上、その存在を示す文献が見つからないが理論的に存在したと考えられる綴りを指す) と推定される。これは、英語の pool と同じ語源。

Beaujolais ボジョレの語源について。

ラテン語 Bellum 「美しい」の対格 + jugum 「山、丘」の対格 + ensem 「~の (接尾辞)」の対格。

Bellum => Bello => Bel => Beu => Beau
jugum => jogo => jog => jou => jol
ensem => ese => es => ois => ais

Beaujou (中世のボジョレー村の綴り => Beaujeu (現在のボジョレー市の綴り)

現在の Beaujolais の綴りの中に、いつどうして 1 が入ったのかは、よくわからないが、ボジョレ最大のワインメーカーであるデュブフ社に聞いたところでは、「ボジョエ」だと母音接続になるのを嫌って、発音しやすい 1 の音を挿入したのではないかという意見だった。

なおテレビや新聞では「ボジョレー」という表記をよく見聞きするが、本場では「ボジョレ」という。



2011 年度総会のお知らせ

日時：2011年4月23日(土) 午後2時～5時
会場：大手町サンケイプラザ 201,202 号室
(東京メトロ大手町 E1 出口)
講師：渡邊啓貴氏 (昭 53 卒) (東京外語大教授)
演題：「文化外交よもやま話」



渡邊先生は2008年4月～2010年3月まで駐仏日本大使館公使として派遣され、広報文化関係を担当されました。「LA NOUVELLE No.3」参照。皆様お誘い合わせしてお出かけ下さい。

参加費：5,000円、2011年度分通信費(1,000円)も同時に申し受けます。

申込：4月5日まで
申込先：神奈川孝子：mt-kana@mx6.mesh.ne.jp
Tel/Fax (03)3313-4310
富山 絢子：ANB73700@nifty.com

おつまみこぼれ話

サロンで人気——「Pain Surprise」



カラー写真でないのが残念!

富山絢子 (昭 39)
秋のお楽しみ「講演とボジョレ・ヌヴォオを楽しむ会」では、お料理好きの会員の手を借りて、幹事たちが用意するテーブルがひそかな人気を呼んでいます。おつまみの定番はサンドイッチ、ボジョレ・ヌヴォオに合わせて選んだ6-7種類のチーズ、

第 14 回外語会ツアー 南フランスとパリ 8 日間 旅行記

鈴木惟高 (昭 45)

2010 年 10 月 21 日 (木) 成田空港に 28 人全員が集合。女性 16 名、男性 12 名。内 10 名が仏語科卒。咲耶会 (大阪外大同窓会) から友金守氏御夫妻が参加。

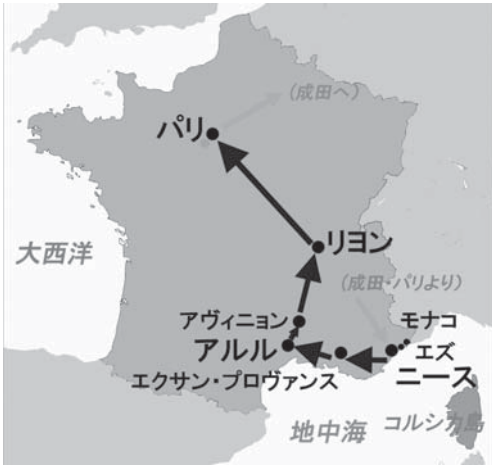
フランスでは年金支給年齢の繰り上げに抗議するストライキ中でその影響が心配。

11:50 AF275 にて成田出発。538 人乗りのスーパージャンボが満席。

17:03 定刻より若干早くパリ シャルル・ド・ゴール空港着。一時間の乗り継ぎでニース (Nice) へ。

20:30 ニース着。しかしストのため迎いのバスが来ず 15 分程機内待機。ようやくバゲージクレームまで辿り着いたがまたもストのためバゲージが出て来ず。結局ガイドさんだけ空港に残り、我々は先にホテルへ。皆疲れていたの風呂に入ってバタンキュー。

荷物が部屋に届いたのは夜中の 12 時過ぎ。添乗員さん、ガイドさん、御苦労さま。



10 月 22 日 (金) 「ニース」－「エズ」(Eze)－「モナコ」(Monaco)－「ニース」

「ニース」ホテル 9:00 出発。昨日大変だったのに皆元気いっぱい。

<旧市街> サレヤ広場散策、朝市が素敵。

快晴で海が素晴らしくきれい。ニースの海岸は砂浜でなく小石海岸なのできらきら輝いている。

<シャガール美術館見学> 旧約聖書をテーマにした絵画の連作が印象的。

「エズ村」山の上まで散策。海拔 429M。断崖絶壁の頂上に村が貼りつく姿から「鷲の巣村」。中世、異教徒のサラセン人や海賊などの攻撃を防ぐ岩山や丘の頂上に堅牢な城壁に囲まれた村が建設された。足の不自由な方もおられたが一番上の展望台まで皆元気に登る。

「モナコ公国」大聖堂の後陣にレニエ 3 世とグレースケリーの御墓がありいつも花が絶えない由。市バスに乗ってモンテカルロ地区へ。車内で K 女史が、年寄りが大勢立っているのに小学生が座っているのはけしからん、注意して来ると勇んで行ったはいいが結局小学生と本と一緒に読む羽目に。結構難しい本でかなり御苦労をされたとか。これも貴重な文化交流。

10 月 23 日 (土) 「ニース」－「エクサン・プロバンス」(Aix-en-Provence)－「アルル」(Arles)

「エクサン・プロバンス」この湧き水の多い地を統治し

た総督の名前を冠して「アクアエ・セクスティアエ (セクスティアエの水の都)」と呼ばれたのが土地名の由来。

<セザンヌのアトリエ> セザンヌが自ら設計して完成。採光のため北側 (南側だと光が強すぎる) に大きな窓、灰色の壁を配し、大きな絵を出し入れするため細長いドアあり。

<ソン・ソヴール寺院> 5－17 世紀に増改築したのでロマネスク、ゴシック、ルネッサンスなどの様式が混在。

<旧市街散策> 名物菓子のカリソンを試食。小道をたっぷり歩いてミラボー通りへ。

<ゴッホのはね橋> ゴッホの絵は生前 1 枚しか売れなかったとか。ここで集合写真。

「アルル」

<旧市街> ローマ人が紀元前 123 年に占領したためその頃の遺跡が多い。

<古代劇場> 紀元前 25 年頃建設 12,000 人収容。

あれれ、誰か舞台上で歌いだした、またひとり歌い始めた、最後は S さんが歌いだした、だけど十八番の「五番街のマリー」でなく「仰げば尊し」だ。何で? でもとても澄んだきれいな声。

<円形闘技場> 1 世紀末頃建設 25,000 人収容。ここでドーデの「アルルの女」の主人公がヒロインと出会う。浮気女で他の男の情婦だったと分かってもどうしても彼女を諦めきれず激しい煩悶の末に命を絶った可哀そうなフレディ。

<フォーラム広場> ゴッホの描いた「夜のカフェ」の舞台。

<サントロフィーム教会> 12 世紀。ロマネスク建築の傑作。

10 月 24 日 (日) 「アルル」－「ポン・デュ・ガール」(Pont du Gard)－「アヴィニオン」(Avignon)－「ワイナリー」－「リヨン」(Lyon)

「ポン・デュ・ガール」高さ 49M、長さ 275M。水源ユゼスからニームまで水を運ぶためつくられた全長 50KM の導水路の一部として建設。

「アヴィニオン」サン・ベネゼ橋をバックに川の畔で集合写真。ここで K 女史の指導でバスの中で練習した「アヴィニオンの橋で」をフランス語で皆で合唱。

<法王庁宮殿> 見学: 1334-52 年にかけて 2 人の法王が建てた宮殿。

<ワイナリー> シャトーヌフ・デ・パブ地区のシャトーでワインの飲み方を懇切丁寧に指導された。

10 月 25 日 (月) 「リヨン」－「パリ」－「シャトー・デ・クロ」(CHATEAU DES CLOS)－「パリ」

「リヨン」フルビエールの丘 ノートルダム・ド・フルヴィエール・バジリカ聖堂。今も盛んなマリア信仰の聖地。旧市街散策

14:00-16:00 T G V でパリへ。

予約した客車に行ったが何と先客に占拠されていた。聞くと 13:00 の TGV を予約していたがストのためキャンセル。窓口に行ったら 14:00 の TGV は自由席のみだからそれに乗れと言われたと。予約切符を見せて席を譲れと頼んだが頑として譲らない。そこへ乗務員がやって来て説得し殆どの客が渋々席を譲ってくれた。先の発言が嘘っぽかったことが判明。いずれにせよこれで一件落着。ところで母親と少女二人の親子連れあり。年端の行かぬ少女の目には我々の登場は暴力団が彼女らの席を奪いに襲ってきたとしか見えず、美少女ジャンヌの瞳に恐怖のあまり大粒の涙が。「大丈夫だよ。そのまま座っていていいんだよ。」と伝える

猪突のようにその場しのぎの果敢な戦闘を随所に仕掛けては尊い命を散らし、聡明・順良な「小国民」も、軍国教育を受け愛国の「殉教者」に成長しては戦場に消えていった。テロ・謀略の「詭道・闇芸」が世界に暴露されて、ぜひ回避したかったはずの<孤立・経済封鎖・国連脱退・日防共協定>の報いに圧迫されながら、夢想家らの「満州帝国」を強引に実現して世界の反感をかい、真珠湾開戦から原爆投下の悲劇へと転落してゆく。追いつめられた「貧しい島国」が未曾有の野望を阿修羅のように演じてのけ、世界を震撼させるのである。

この凄惨な状況下であって、外語の先輩がたはどんな青春を送られたのだろうか。象牙の塔にこもる「学の徒」、大杉栄氏のような無政府主義のサムライ、皇国に奉仕せんと燃える人、片隅で共産革命を夢見る人、エリート坊ちゃんを決めこむモダンボーイと、さまざまな青春の群像がひしめくが、中でも印象的なのは、師弟愛にみちたほほえましい授業風景である。当時の外語は、師弟愛のひそやかなユートピアでもあったことがわかる。

ここに 80 年のタイムカプセルを開け、目をひかれる当時のさまを (先輩諸兄姉のご叱正をも借りながら) ささやかな連載コラムに、順次綴ってゆきたいと思う。(次回へつづく)

と途端に天使の微笑みが。よかったね! 親子はマルセイユ (Marseille) から来たがそこは清掃業者がスト中で街中ゴミだらけとのこと。「席を譲って頂きましたが、何故貴女は私達にそんなにご親切なのですか。「(カッコよく) 日本では男子たるもの女性や子供には親切にせよと教わっていますから。」「フランスでは必ずしもそうではないのよ。」彼女は夫と離婚しておりこれから別れた元夫に子供達を会わせに行くのだと寂しげな表情。絶句。

またフランス人の子供達に折り紙を教える女性団員あり。いつも孫に教えているそうで素敵なお光景。

「パリ」リヨン到着後バスで坂口功一氏 (F 昭 44 卒) が所有・経営するシャトー・デ・クロに移動。まだ日没前だったので奥様のご案内で素晴らしい庭を散策。大感激。



「外語会パリ支部との交歓会」

パリ支部からの出席者沼田睦子 (F 昭 44 卒) 支部長以下 4 名、咲耶会から浦田支部長が出席 (当初もう 1 名出席予定だったが体調不良のため欠席)。

外語会上原理事長のメッセージを神奈川団長が代読。シャンペンにはじまり 3 種類の最高級のブルゴーニュワインとともに王侯貴族の気分でフルコースの素晴らしいディナーを満喫。

坂口さんは学生時代パリに滞在しそこで奥様と運命の出会いをし熱烈恋愛におちたと。

その奥様が我々の訪問前ひどく体調を崩していたのに嘘のように良くなったとバラのように微笑まれた。また沼田支部長も腰を痛め数カ月動けない位辛い闘病生活していたのに我々の来訪に合わせ嘘のように元気になったのよとコロコロとお笑いになった。我々はシャトーで大感激だったが、我々もパリの皆様に元気を運ぶことが出来たのかな。皆ご満悦であつという間に三時間が過ぎ、まだ語り切れず後ろ髪をひかれる思いで辞去。

坂口さん、奥様、本当にありがとうございました。

10 月 26 日 (火) パリ 終日自由。

オプション プラン (モン・サン・ミシェル等)

10 月 27 日 (水) パリ 終日自由。

18:30 近くのレストランで解散式。別ルートで帰国する 2 名を除く 26 名が参加。

23:35 AF278 にてシャルル・ド・ゴール空港出発

10 月 28 日 (木) 18:00 成田空港着 皆元気で解散。

2010 年フランス語劇を観賞

松本伸夫 (昭 38)

外語祭初日の 11 月 19 日、大学正門そばに開館した異文化交流会館「アゴラ・グローバル」で、フランス語科 2 年生が語劇「レ・ミゼラブル」を上演した。ヴィクトル・ユーゴ原作の有名な大河小説を 1 時間半内に超短縮してミュージカル仕立てで上演したもので、登場人物も多く、舞台裏で仕事をした学生たちも含めると総勢 60 人には達するとみられる大舞台だった。

第 1 幕は元服役囚のジャン・ヴァルジャンが司教館に忍び込み、銀の食器を盗んで警察に捕まりかけたとき、司教が銀の燭台まで与えてジャンをかばって助け、真の人間に悔悟させる有名な場面。その後はテンポよく劇は進行、登場人物の多いパリ市内での共和派の市街戦も手際よくまとめられ、セリフのフランス語も役者だけでなく、幕間のナレーションも含めてよく聞き取れたというのが、先輩たちの一致した感想だった。

終演後、ホールわきの喫茶室で藤倉洋一仏友会副会長が、監督の中桐祥子さんに祝い金 3 万円を手渡した。そのあとジャヴェール警部を演じた細井俊助君ら出演者を囲んで先輩の相馬寿美乃副会長、寺田朗子国境なき子どもたち会長も交えて記念撮影、交流を深めた。

昔日の青春「佛友會々報」

80 年のタイムカプセルを開ける 1

坂井英俊 (昭 40)

心に感じる時間と物理的な時間とは別のものである。かたつむりは自分の歩みが遅すぎるとは思っていない。「80 年の昔」とは地球的にはほんの一瞬であるが、人にとっては遠い過去である。が、過去とは、縁に応じて幾度でもよみかえる「永遠化」でもある。

故あってこのたび昭和 7 年からの「佛友會々報」に接したが、それを読み進むうちに私は静かな興奮を覚えた。若き日の大先輩がたが、遠い後輩の私たちに青春の日々を語りかけてくる。時代の空気をも感じる。思えば当時の日本は、まさに「国家存亡の岐路」に立ちっており、国民の心は、明治以来の楽観と新たな不安とに揺れていたのではなかろうか。

日本は外交戦である大戦に敗れたとよく言われるが、実は「語学力」でとうに敗れていたのだと、ある先輩は言う。斬るか斬られるかの (一国エゴ・帝国主義の) 瀬戸際外交では、鋭利な語学力が武器となるが、なまくら刀の悲しさか多くの誤報が発せられ、ただでさえ分裂していた外交方針を大いに迷走させた。「情勢を自分の思いたいように思う」陸軍は、

